豊岡短期大学論集　No.13, 1～10（2016）

教育史・教育思想の概観からの教育の方法

伊　藤　　博

Method of Teaching Based on the History and Ideology of Education

ITOU HIROSHI

豊岡短期大学 論集
第 13 号　別 冊
平成 28 年 12 月 20 日　発 行

教育史・教育思想の概観からの教育の方法

Method of Teaching Based on the History and Ideology of Education

伊　藤　　博
ITOU HIROSHI

1．はじめに

（1）教育とは

教育とは何か、といった問いかけに対して、数多くの思想家や教育家が様々に定義してきた。例えば「子どもの成長や発達を支援すること」、「子どもを社会化すること」などが考えられてきた。そして、カント[1]（1724-1804）は「人間は、教育されなければならない唯一の被造物である」と説き、教育は人間にとって必要不可欠なものとした。

さて、最近の生物学の研究で動物において高等な動物としての鳥類･哺乳類などでは、生後に獲得していくと考えられる行動の形式が発見された。これを「インプリンティング[2]」(刷り込み)と呼び、そのメカニズムの研究が教育問題との関わりで盛んにおこなわれている。

そして、こういった動物でも生後しばらくの間は餌を自分で取ることができない。そのため、親からの給餌により親に育てられ成長していくことになる。このインプリントされた行動は、本能であるかのように機能していくものの、実際には誕生後のごく初期の一定の環境条件のなかで習得されたものであると解明された。そして、そういったものの中に人間の学習にもつながるような教育の始まりがあると考えられる。

（2）「教育」の語源について

前述のように、動物を含めた教育の始まりは、親が子に食物を与えながら、育てる養育と密接に関係している。

英語のeducateは、ラテン語のeduce(引き出す)から来たeducareを語源としているといわれている。つまり、植物や動物などに肥料や水をやりながら「育てる」という意味合いを持ったものであったようだ。その後、子どもを養い育てるといった「養育」を意味するようになり、さらに今日の「教育」

---

[1] Immanuel Kant、ルソーの影響を受ける。著書『教育学講義』『純粋理性批判』『実践理性批判』などがある。「人間は教育によってのみ人間となる」「人間は教育されなければならない唯一の被造物である」などの言葉を残している。

[2] 動物行動学者であるロレンツが、ハイイロガンのヒナが生後十数時間以内に刺激対象が与えられないと追従反応が生じないことを見いだした。これを「刷り込み」（刻印付け･インプリンティング）現象といい、この時期を臨界期と名付けた。これにより、1973年にノーベル賞を受賞した。

といった意味でも使われるようになった。同様にまた、日本語の「そだつ」は、「巣立つ」を語源としているものと考えられ、生物などの人間が成長することをも意味しているようである。

こういったことから、「教育」とは親が子どもを養い育てる生物的な子育てに始まったのが、やがて社会の一員としての社会的･文化的行動様式を教える意味が発生するようになり、「教育」の概念が成立してきたものと考えられる。

（３）教育の理念・理想、思想の流れについて

教育の理想についての考え方は、人間の持つさまざまな能力を多面的に調和的に発達させることなどが古くから存在していた。例えば古代ギリシャ･ローマ時代では、教育とは現在のような公共のものではなく、全て私的なものであったものの、教育の基本目標としては「実際の生活に役立つ市民の教育」が本質としてあげられていた。そしてさらに、レオナルド･ダ･ヴインチなどに代表されるようにルネッサンス時代においては、「人間性の尊厳を重んじる人本主義」が理想とされていた。その一方で近代初頭では、労働における分業化の発展のため精神労働と肉体労働との乖離が深刻化していた。こういった乖離を克服して労働と教育とを統合することが、人間を育てるうえでもっとも重要な課題として考えられるようになった。そして、教育における全面発達論の芽生えとして以下のような考え方を唱える人物が現れてきた。

１）トーマス･モア[3]（1478-1535）の『ユートピア』（1516）では万人皆労の平等社会を構想して、労働に関する教育がすべての子どもに対しておこなわれることが理想だとした。この思想の流れは、それ以降のルソー[4]（1712-1778）やペスタロッチ[5]（1746–1827）などの近代の教育思想家に影響を与えるとともに、労働の教育的意義が議論されるようになった。このルソー以後の近代教育思想において、初めて市民などを対象にした全面発達論が登場し始めた。これは、人間の諸能力の調和的、統一的発達を目指している概念であり、人類の教育理想として発展してきたものであった。

２）ルソーは、その著書『エミール』の中で「農夫のように働き、哲学者のように思索する人間」の育成を教育の目標としていた。ルソーは、当時のフランスの特権階級の教育が人間の自然の発達をいかに阻害して歪めているかを強く断罪した。そして、実際に働く農民の生活のかなりの部分が教育的機能を果たしていると指摘するとともに、労働の教育そのものが子どもの知性の開発・向上に資するとしている。

---

[3] ロンドンの法律家、『痴愚神礼讃』や旅行記『新世界』に触発され、1515-1516年にラテン語で『ユートピア』を執筆した（1516年刊行）。ユートピア（Utopia）は、どこにも無いという意味の言葉で、古くは「理想郷」あるいは「無何有郷（むかうのさと）」などとも訳されている。

[4] フランスの哲学者であり、「近代教育思想の祖」といわれている。子どもの発見者。自然主義･消極教育を主張。著書『エミール』『社会契約論』などがある。『社会契約論』の中で社会契約と一般意志の概念を定義した。

[5] スイスの教育実践家であり、孤児や貧困の子どものための学校を設立した。著書として初期の教育実践で失敗後の自己告白の書である『隠者の夕暮』(1780年)や『白鳥の歌』(1826年)などが著名である。

３）全面発達論を大きく前進させ、その現実的可能性を科学的に解明したのはマルクス（1818-1883）であった。彼は、資本主義大工業の経済学的分析を行い、大工業の本質そのものが「労働の転換、機能の流動、労働者の全面的可動性を必然的」にし、「一つの社会的細部機能の担い手でしかない部分個人の代わりに、いろいろな社会的機能を自分のいろいろな活動様式としてかわるがわる行うような全体的に発達した個人をもってくることを一つの死活問題にする」（出典：マルクス『資本論』第1巻13章、1867）との考えに基づいて全面発達論を展開した。

（４）教育における発達課題の提唱

教育と密接な関係がある発達課題は、アメリカの教育社会学者ハヴィガースト[6]（1900-1991）が最初に提唱したものである。発達課題とは、人の幸福な発達のためには各発達段階において達成しなければならない課題であるとした。つまり、人の健全な発達のためには人生における各段階においてそれぞれ課題があり、その段階で達成しておくべきものであり達成することが期待されているものとした。そして、この各発達段階の課題を達成することにより、次の段階への移行は順調に進むが、その課題達成が順調よく行われないと、次につながる段階にうまく進めず、問題を引き起こすおそれがあると説いている。

（５）発達段階の提唱

発達とは、連続的に進行する一定の規則に基づいた変化であるが、その発達の過程は画一的ではなく、まとまりのある“段階”に分けることができる。この発達が進行する中で確認できる顕著な特徴を基準にし、発達の過程を幾つかの段階に分けて分類したものを『発達段階』と言う。この発達段階は、各段階において他の段階と明瞭に区分する事ができ、各段階はいったんその段階にたどり着くともう逆戻りすることはない。この発達に関わる重要な理論を唱えた人物としてピアジェやフロイトなどを以下に簡単に紹介する。

１）認知主義の立場であるピアジェ[7]（1896-1980）の発達理論の中心は、以下のような４つの質的に異なる発達段階が設定されている。

１：感覚運動期　　２：前操作期　　３：具体的操作期　　４：形式的操作期

の４つであるが、ピアジェによると、正確な年齢規定は行ってはいない。

さて、幼児の知能の発達については、ピアジェの３つ山問題が非常に有名である。これはピアジェらの『子どもの空間表象』（Piaget. J.　et Inhelder. B. 1948）により報告されている。

この実験では、大きさの異なる３つの山をそれぞれに配置した１メートル四方の大きさの正方形の模型を使用した。実験対象の子どもをＡの座席に座らせた後、他のＤの座席に目鼻のない人形を置いて、それぞれの山の見え方をさまざまに書いた絵の中から「この人形が見えている風景はどれ

---

[6] アメリカの教育学者、著書は"Developmental Tasks and Education"『人間の発達課題と教育』である。

[7] Jean Piagetは、スイスの心理学者。20世紀において最も影響力の大きかった心理学者の一人である。ピアジェの発達理論の中心となる概念はシェマ･同化と調節･均衡化･操作の４つである。

か」を選ばせるといったものである。これは、他者の視点を理解するとともにその状況を正確に述べることができるかを判断するテストであった。その結果、次のようなことが判明した。

１．４歳以下の子どもは質問の意味が理解できない。

２．初期の子どもは、自分自身が見ている風景と同じような、似たような絵を選ぶ。

３．次の段階の子どもは、部分的に山と山の重なり具合を考慮するようになる。

４．さらに次の段階の子どもは、複数の関係を考慮しながら、適切な絵を選択できるようになる。

こういったピアジェの観察は現在においても通用するものとして認められている。

２）フロイト[8]（1856-1939）の発達論は、人格は幼少時代に形成されるが、このとき性的衝動であるリビドーの発達が大きく関わっているとした。そして、これが人間の行動の背後にある力であり、以下の5つの発達段階として「口唇期（口唇への刺激によって赤ちゃんは信頼や快適といった感覚を学ぶ）」「肛門期（膀胱や胃腸の動きをコントロールすることに向けられる）」「男根期（子どもは男と女の違いを学ぶ）」「潜伏期（６歳から思春期にかけてリビドーの関心が抑圧される）」「性器期（異性への強い性的関心を発達させる）」をあげている。

そして、抑圧されていて普段意識することができない「無意識」といった心の世界に注目し、夢を分析することにより無意識の世界を知ることができるとして『夢の分析』（1900年）を著すなどした。

３）フロイトの考え方をもとにして、分析心理学の理論を創始したカール･グスタフ･ユング（Carl Gustav Jung,1875-1961）や個人心理学（アドラー心理学）という分野を創始したアルフレート・アドラー（Alfred Adler,1870-1937）などがあげられる。ユングは、フロイトの提唱した「リビドー」が性的なものを中心としていたがこれをさらに広い意味（「集合的無意識」と「元型」の概念）へと再定義を行った。アドラーは、「性格は変えられる」や「嫌われる勇気をもて」など、従来からの常識を覆す幸福論を提唱して教育や人材育成などの領域に多大な影響を与えた。

４）エリクソン[9]（1902-1994）は、人生を８つの段階に分類し、それぞれの段階で『健全･不健全』または『発達の成功・停滞』というような二項対立としての特徴や傾向があるとした。そして、各発達段階には以下のようなものがあり、それぞれの段階で固有の危機（クライシス）があると主張した。

乳児期（基本的信頼と不信）、幼児期前期（自律性と恥・疑惑）、

幼児期後期（自主性と罪悪感）、児童期（勤勉性と劣等感）、

---

[8] Sigmund Freudは、オーストリアの精神科医であった。精神分析学の創始者として知られる。人間が意識していない部分である「無意識」の領域を初めて扱ったフロイトの精神分析は、「無意識の哲学」として非常に有名なものである。著作として『夢判断』がある。

[9] Erik Homburger Eriksonは、アメリカの発達心理学者で、精神分析家でもある。彼は、「アイデンティティ」の概念を提唱したことで知られる。とくに青年期における「同一性vs。同一性の拡散」の考え方は重要である。

思春期・青年期（アイデンティティとアイデンティティの拡散）

成人期（親密と孤立）、壮年期（世代性と停滞性）、老年期（統合性と絶望）

例えば、思春期･青年期では、「自分とは何者であるのか」や「自分は何になりたいのか」や「周りからどのように見られているのか」といった心の世界での葛藤がきわめて強く、自分自身の気持ちに関心が向けられる時期でもある。そして、この時期でのアイデンティティの確立が極めて重要なものとなるとした。

（６）幼児教育において注目すべき理論「発達の最近接領域」

ロシアの心理学者ヴィゴツキー（1896-1934）は、その後の幼児教育において多大な影響を与えた「発達の最近接領域」という概念を提唱した。ヴィゴツキーは、子どもはまず親や教師・仲間などに教えられたり、ちょっとしたヒントをもらうなどしたり、模倣をしたりしながら、新しい問題や課題に対処していくが、やがて自分だけでそれをやり遂げることができるようになってゆく。つまり彼は、「まったく解決不可能な領域と独力で解決可能な領域との間に、他からの援助があれば解決できるという領域が必ずある」と考え、これを「発達の最近接領域」と名付けた。 この理論は、幼児教育においてきわめて重要な意味を持った理論であるが、ヴィゴツキーが若くして亡くなったため、さらなる研究は他の教育学者に任せられることとなった。

２．古代から現代までの教育方法の流れ

（１）古典的な教育方法

古くは、伝聞や口述による伝承が行われていたようであり、その一例として文書の暗唱などの方法があった。さらに、次の方法として、古代ギリシャの哲学者らにより模索された。ここでは、文字を媒介とした知識の記録や民主政治が大きく関わってきた。例えば、ソクラテスの対話による問答法などがあり、これを産婆術問答法と名付けて盛んに活用し、無知の知や教条（ドグマ）主義からの解放を説こうとした。

（２）中世の教育方法：中世の教会と大学の教育との関わり

中世の大学での教育は宗教教育が中心であり、教育方法としては主として「修辞学 」が取り入れられた。大学では、リベラル･アーツと呼ばれる自由七科が教育の中心であり、この自由七科は文法、修辞学、弁論術といった３つの「修辞学」と算数、地理学、天文学、音楽といった４つの「数学」から成り立っていた。

（３）理論家による教育方法としての教授学の成立

---

[10] 旧ソ連の心理学者(1896-1934)、1934年に『思考と言語』を著し、その中で「発達の最近説領域」という考え方を示した。37歳の若さで死去している。

[11] 修辞学(レトリック)とは、弁論・叙述の技術に関する学問分野であり、言葉を美しく巧みに用いて効果的に表現する学問のことである。

1）コメニウス[12]（1592-1670）は、『大教授学』（1632）、『世界図絵』（1658）を著した。

・『大教授学』では、あらゆる人にあらゆる事柄を教授する普遍的技法を提示した。

2）ロック[13]（1632-1704）は、タブラ･ラサ（精神白紙説）を理論とした。

・彼は、心の中には生まれながらにあらかじめ刻みつけられた観念や原理はないとし、経験によってそして学習方法さえ確実であるならば、子どもの心はどのような方向にでも決定できるとした。さらに、身体的訓練と精神的訓練を施せば、立派な人間にすることが可能であるとした。

3）ルソー（1712-1778）は、『エミール』を著した。

・子どもの素質を善と考え、子どもの自発的な成長を促すとした。

4）ペスタロッチ（1746-1827）は、貧民院設立（1774）や孤児院設立（1798）をした。

・ルソーの流れを汲む思想から実践としての教育方法へと導いた。

・あいまいな直観から、明晰な言語で表現される概念へと到達する過程が、子どもが合自然の原則を体得して、近代的な主体へと成長する筋道とした。

5）ヘルバルト（1776-1841）は、『一般教育学』と『教育学講義綱要』を著した。

・教育学の創建者であり、「道徳は、一般的に人類の最高目的だと認められている。したがって、それはまた教育の最高目的でもある」とした。

（4）現代につながる一斉授業の成立

コメニウスが近代の学校を構想したが、およそ200年後にヨハン・ハインリッヒ・ペスタロッチがルソー等の教育思想を実践して、教育方法の模索を始めた。その後、ヨハン・フリードリヒ・ヘルバルトが一斉授業の普及と制度化を検討し、ヘルバルト学派の人々によってこの考えが各国に浸透した。

1）ヘルバルト[14]（1776-1841）は、ドイツ教育学の創建者で一斉授業の普及と制度化を推し進めた。

ヘルバルトの考えによると、教育とは全て道徳教育へと通じるべきものであり、道徳的市民の形成を通して、近代国家の理想を実現しうると考えていた。そして、倫理学と心理学を教育の基礎と考えており、ヘルバルトの著書『一般教育学』で教育の目的は倫理学、教育の方法は心理学によって示されるとした。そして、教育の究極の目標は、「強固な道徳的性格」の形成であり「品性の陶冶」だった。「品性の陶冶」である教育目的を実現する教授法として以下に示すような三つの概念を提唱した。

教授：子どもに興味･関心を持たせるよう知識を伝達し、習得させる機能

訓練：陶冶しようとする意図をもって、青少年の心情に直接に働きかける機能

---

[12] 現在のチェコソロバキア生まれ、本名はヤン・アーモス・コメンスキー。 現代の学校における教育のしくみ(同一年齢･同時入学、同一学年･同一内容、同時卒業など)を構想した。

[13] イギリスの哲学者･政治学者であり、社会契約論などの考えは、後のアメリカ独立宣言やフランス人権宣言に大きな影響を与えることとなった。

[14] ドイツの哲学者、心理学者、教育学者であり、ペスタロッチの影響を強く受けた。 教育の目的を倫理学に、方法を心理学に求めて教育学を体系化した功績は大きい。

管理：子どもの欲望を統制したり、教室内に秩序を実現したりする機能（事前の環境構成や事前準備も含まれている）

２）ヘルバルトによる４段階教授法（教授の進め方）

その著書『一般教育学』で「明瞭（個別の知覚）」、「連合（表象の連合）」、「系統（多数のものの関係･秩序）」、「方法（応用）」といった四段階説を主張した。

３）ヘルバルト学派の人々（ツィラーやライン）

ツィラー[15]（1817-1882）は、４段階教授法を５段階へと改め、教材をひとまとまりにする単元（方法的単元ともいう）の考え方を提示した。

さらに、ライン[16]（1847-1929）は以下のような５段階教授法に本格的に修正した。

それは、「予備」：授業開始時にその内容を予告する、「提示」：内容についての説明と伝達、「比較」：新旧の内容を比較・関係づける、「総括」：学習のまとめをする、「応用」：他の類似の事例など内容の定着をはかるとした。

そしてこの流れは、我が国の教育現場において行われている「導入」→「展開」→「まとめ」の基礎となっていることがわかる。日本では、こういったヘルバルト派の思想の普及とともに五段階教授法が受け入れられることとなり、それにより授業が教師中心、教科書中心の方法が当然のものになってきた。

（５）新教育運動と教育方法、その後の西洋の教育方法

20世紀では、公教育制度における教育方法でのあり方として画一性や硬直性への批判が噴出し始め、新教育運動と呼ばれる学校改革運動が展開されることとなった。このときに、様々な理論が提唱されたりや実践がなされることとなった。その概略を以下に説明する。

１）ジョン・デューイ[17]（1859-1952 ）は『学校と社会』（1899）の著作の中で、旧教育は子どもを中心に置いていないものであるとしている。これを「重力の中心が子ども以外にある」と述べている。そして、子ども自身の本能や活動を中心とした教育活動を行うべきであるといった「子ども中心主義」の教育を提唱した。

２）単元学習としては、ウィリアム・ヒアド・キルパトリック[18]（1871-1965 ）の「プロジェクト・メソッド」やヘレン・パーカースト[19]（1887-1973 ）の「ドルトン・プラン」などがあり、日本などのアジア諸国への影響が大きかった。

---

[15] ドイツの教育学者、ヘルバルト派の代表的な理論家の１人。 著書として『教育的教授論の基礎』がある。

[16] ドイツの教育学者、ツィラーのもとで学んだ。 ツィラーの五段階教授法をドイツ語で呼び変えた。 著書として『体系的教育学』がある。

[17] アメリカの哲学者、プラグマティズムを代表する思想家であり哲学家でもあった。 その著書である『論理学：探究の理論』において「実験主義」が一般理論化された。

[18] アメリカの教育学者であり、ジョン・デューイの弟子である。 進歩主義教育の理論的指導者である。プロジェクト・メソッドとは、経験主義教育理論を具体化した問題解決学習の方法である。

（６）日本における維新前後から第二次世界大戦後までの教育方法

明治までの藩校･寺子屋などでは手習いや暗唱などによる模倣と習熟を中心とした教育活動が続いた。江戸時代では武士を対象とした「藩校」があり、藩の武士の子弟に儒学を中心に教えていた。この「寺子屋」では、庶民の子どもたちに僧侶や浪人らが「読み、書き、そろばん」を教えていた。このような教育が一般庶民にまで施されていたため、この頃の日本人の識字率は世界の中では極めて高かったといえる。

さて、日本での教育制度の出発点は当時の文部省によって出された「學事奬勵ニ關スル被仰出書」（明治５年）であったといえる。ここでは、国民皆学や教育の機会均等などをうたった。

明治４年に廃藩置県、文部省設置（初代文部卿：大木喬任、文部大輔：江藤新平）を行い、明治５年に「学制」発布がなされた。これは、全国の教育行政を文部省が統轄することを明示したものであり、全国を８大学区、256 中学区、5万3760 小学区に分け、区ごとに各一校設置する計画を規定した。

この「学制」により学校種や教科名称等も規定されたが、文部省はまずは小学校の設置に注力した。明治12年には教育令が出され、「学区制」を廃止し、町村を基礎に小学校を設置した。そして、明治14 年に「小学校教則綱領」を制定し、教科の内容、時数等を明記した。ようやく明治15年頃から全国的に教育が統一化しはじめたが、中学校については、規程は整備されたものの設置は不十分だった。教科書は、当初文部省及び師範学校で翻訳編集し、その後教科書の認可制度が開始（明治16年）された。わが国における公教育制度が完成するのは、明治５年の学制の発布から始まり30年近くたった明治33（1900）年のことであった。そして、この年に義務教育の授業料廃止が実施され、実質的に義務制、無償制、宗教からの中立性の三条件が成立したことになる。

その後、大正自由教育運動などの新教育運動が起こりドルトン･プランなどが取り上げられた。第二次世界大戦の後、国家中心の教育から子ども中心の教育への転換が試みられた。しかし、「這い回る経験主義」という批判もあったほか、基礎学力の充実に対する要望や修身科の復活要望等もあった。この「這い回る経験主義」とは、アメリカの教育学者のジョン・デューイが戦前に提唱した教育理論であり、「学者が築きあげた理論よりも、子どもたちの実践を重視する」という教育方法のことであった。経験主義を重視し、系統主義を軽視するこのような教育論を「這い回る経験主義」と呼び、特に学者から猛烈な批判が出ることとなった。

日本の学校教育においては終戦直後に経験主義的な問題解決学習がさかんに導入されたが、その後学力低下への批判から系統学習に基づく詰め込み教育へ移行した。

そして、昭和33（1958）年版の学習指導要領においては「官報による告示」によって、法的拘束力を持つカリキュラムとなっている。そして、この学習指導要領は、系統学習の色合いが強いものであっ

---

[19] アメリカの教育学者、1919年にウィスコンシン州ドルトンの男女共学の高等学校に奉職し、ここでモンテッソーリやジョン･デューイから着想を得た個別学習と協同による「ドルトン･プラン」のアイディアを創出した。また、日本での大正自由主義教育に大きな影響を与えた。

た。

1960年代以降、「教育方法の現代化」での初期の取り組みが行われるとともに各種の教材プログラムの開発が盛んに行われるようになった。その中で、遠山啓の「水道方式」(数学)や板倉聖宣らの「仮説実験授業」(理科)などがある。

さて、1980年頃以降は、学力低下が問題となり「教育方法の現代化」以降として課題解決型の教育の方向に流れてきているほか、コンピュータ・マルチメディアを含めた教育工学的なアプローチなども研究や実践などがなされはじめている。さらに近年では、教育の方法をめぐる問題として再び学力低下への危機感(いわゆる「ゆとり世代」の現出)から、現在のゆとり教育の見直しを迫る声があり、その中で、各学校での授業展開に行き詰まりを見せている「総合的な学習の時間」の見直しなどの再検討が進んでいる。

(7)授業の方法での様々なアプローチ

現在では、「問題解決学習」「プログラム学習」「発見学習」「有意味受容学習」「完全習得学習」といった様々なアプローチが開発されているので以下に概説する。

1)問題解決学習:単元学習とも言われ、デューイが経験重視の教育哲学に基づいて、児童・生徒の主体的な経験を通して習得させようとした。デューイは学習活動において試行錯誤する過程にこそ学習の意義があり、その過程そのものが学習であると考えた。現在、文部科学省は、大学教育改革のためにアクティブ・ラーニングの実施を推奨しており、その一つとしてこのデューイによる課題解決型学習をあげている。

2)プログラム学習:アメリカの B. スキナーが行動主義心理学からの立場から提唱したものである。これは、現在の学校教育の現場にも影響を与えている。このプログラム学習には次のような5つの原理がある。「スモールステップの原理(教材の小刻み提示)」、「積極反応の原理(学習者のやる気を引き出す)」、「即時確認の原理(学習内容の即時確認)」、「学習者自己ペースの原理(理解度に合わせて教えるペースを調整する)」、「学習者検証の原理(教育の効果を学習者の理解度により検証する)」である。

3)発見学習:J. S. ブルーナーが『教育の過程』で提唱したもので、直観と検証を重視した。ここでの教師の役割は、児童・生徒を自ら問題を発見し、その解決にむかわせることである。そして、その方法として教師と児童・生徒との間で対話を行わせることになる。この学習は、主として科学の基本概念の理解に非常に有効なもので、世界的に注目されるようになった。なお、日本でも、同様の考えに基づく板倉聖宣による「仮説実験授業」が理科の授業において採用されている。

4)有意味受容学習:オーズベルが提唱したもので、認知を重視し意味のある新しい教材を使用する。学習者が既知としている認知構造へ関連づけることにより新規に取り込ませようとするものである。そのために、この両者をつなぐ手がかりとしての補助教材が有効であるとし、これを「先行オーガナイザー」と称した。これは、例えば、12歳以降(具体的操作期以降)の言語学習にお

いて、先行オーガナイザーの提示により学習が容易になるという考え方である。

5）完全習得学習：ブルームが提唱した。学習の過程で形成的評価を行い、当該学習者が教育目標を達成できているかを常に確認し、そのたびに適切な指導をすることで学習者が学習の達成ができると主張したものである。学習者のほぼ全員に教育内容を完全に習得させようとするものであり、これを繰り返して学習に十分な時間を与え完全な習得を目指すものである。これは、マスタリー・ラーニングとも呼ばれている。

３．おわりに

以上のように教育の方法は、教育の思想や理念とともにそれぞれの時代の変遷に合わせながら様々なものが改善・修正され、提唱されてきた。そしてとくに、現代の教育方法に関しては、コンピュータなどの最新情報機器の発達やインターネットやＳＮＳの普及などがすすみ、画一的な「一斉授業」の見直しに始まり、個々にあった教育方法の模索が続けられている。さらには前掲のように授業の方法での様々なアプローチなど今後の研究や実践に任されている部分も数多く存在する。

【参考文献】

赤塚康雄『新制中学校成立史研究』明治図書,1978
東洋編『教授と学習』(教育学叢書10)第一法規,1968
岩波講座『教育の方法』全11巻 岩波書店,1987-88
岡田正章･笠谷博之編『教育原理・教職論』酒井書店･育英堂,2005
斎藤貴男『教育改革と新自由主義』子どもの未来社,2004
斎藤喜博『教育学のすすめ』筑摩書房,1969
佐伯胖『新・コンピュータと教育』岩波新書,1997
佐伯胖･宮崎清孝･佐藤学･石黒広昭『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会,1998
佐藤学『米国カリキュラム改造史研究-単元学習の創造』東京大学出版会,1990
長尾十三二『西洋教育史』東京大学出版会,1978
野瀬寛顕『学び方教育のすすめ』小学館,1980
波多野完治編『ピアジェの認識心理学』国土社,1966
平沢茂編『教育の方法と技術』図書文化社,2014
平原春好『日本の教育課程(第2版)』国土新書,1980
森田尚人『デューイ教育思想の形成』新曜社,1986
アリエス『教育の誕生』(中内敏夫・森田伸子編訳)新評論,1980
コメニウス『大教授学』(鈴木秀勇訳)明治図書,1974
デューイ『学校と社会』(宮原誠一訳)岩波文庫,1957
デューイ『民主主義と教育(上)』(松野安男訳)岩波書店,1975
フレーベル『人間の教育』(荒井武訳)岩波文庫,1964
ポルトマン『人間はどこまで動物か』(高木正孝訳)岩波新書,1961
ヘルバルト『一般教育学』(三枝孝弘訳)明治図書,1960
カント『教育学』(カント全集第16巻)(尾渡達雄訳)理想社,1966
ナトルプ『社会的教育学』(篠原陽二訳)玉川大学出版部,1899
ペスタロッチ『隠者の夕暮れ』(長田新訳)岩波書店,1941
ルソー『エミール』(今野一雄訳)岩波文庫,1962
ロバート･J･ハヴィガースト『人間の発達課題と教育(荘司雅子監訳,沖原豊･岸本幸次郎･田代高英･清水慶秀共訳)』玉川大学出版部,1995
ヴィゴツキー『思考と言語(新訳版)』(柴田義松訳)新読書社,2001